

湯前神社の  
歴史と伝承

湯前神社の歴史と伝承

## はじめに

私達が湯前神社奉賛会を設立して、今年で丁度二十年目を迎えます。

それまで、私も湯前神社については殆ど何も知りませんでした。

熱海温泉のこれからの方針として、温泉を中心街づくりを考えたとき、熱海温泉のお湯の守護神湯前神社を大切にすることが「お湯を中心とした」街づくりの精神的な支柱になるとと考え湯前神社奉賛会を発足させ、それを機会に湯前神社について勉強するようになりました。

奉賛会にも新しい仲間が年々増え、今日まで色々と調べてきた事を新

しい人達に伝えて行くことが、奉賛会の人々は勿論、熱海市民のためにも意味のあることだと考へるようになりました。

そこで、不充分な事は重々承知しておりますが一応の纏めをしてみることに致しました。

表題に「歴史と伝承」と付けましたのは、湯前神社の歴史と申しましても生い立ちについて多くは「言い伝え」といったものが多いのですが、「言い伝え」は「作り話」と違つて歴史上の事実あるいは歴史上の精神的風土を反映するものと私は大切に考えております。

## 湯前神社の生い立ち

湯前神社の由来について、文政十三年に山東庵京山の書いた本の中の「熱海温泉由来」によりますと、「わが国では温泉に浴して病を療治する事は少彦名命を以て始めとする」と述べられております。蛇足と思いますが、ここで少彦名命（すくなひこなのみこと）とはどんな神様か触れておいたほうが良いかと思います。

少彦名命は古事記によりますと海のはるか彼方から羅摩（かがみ）の実を割つて鵠（ひむし）の羽で内張りした小さな舟に乗つてやつて来て、独りではどう国造りをすればよいか案じあぐねていた大国主命を助け、協力して国造りを行つた神様で国造りが終わつたのを見届けると何も求めず、また海の彼方へ去つていった、何とも格好の良い神様で、私達日本と日本人にとつては生みの親に相当する神様です。

日本書紀には『現世の人民と家畜のために其の病を治療する方法を定め、また鳥獸・昆虫の災いを除くための「まじない」の方法を定めた』と記されております。

その姿の小さな事は、「淡島に行つて栗の茎に攀じのぼつたら、はじかれて常世の国に行つてしまわれた」とも記されています。

そこから病を治す神、薬の神、厄除けの神、あるいは百薬の長である酒の神、と言われるようになりました。

熱海の温泉は人王二十五代仁賢天皇（四八八～四九八）の頃、温泉が海中に湧き出て魚類は死に絶え、ために人跡も絶えてしまっていた。

それから約百八十年程たつた人王三十九代天智天皇（六六八～六七一）の天平宝字の頃、箱根権現に徳の高い僧が居り、日々万巻の経本を読んでいたので人々は万巻上人と呼んでその徳をたたえていた。

あるとき、常陸の国の鹿嶋明神参詣の帰途、熱海をとおり海上を見渡したところ、波の内より煙が立ち昇り火焰が吹きだして魚類は焼け死に焦熱地獄の様相を呈していました。上人はこれを見て大変哀しまれ、暫く立ち止まってお経を読み念仏を唱えていたとき、どこからか白髪の翁がやつて来て上人に向かい「見られるように、此の海中に

温泉があつて熱湯を噴出し魚類を焼き殺している事を常に哀れに思つていた。そればかりではなく人の万病を治す不思議な靈湯を海中に置いておくのは玉を淵に沈めておくに等しい。どうか仏法の功德を持つて上人がこれを祈りこの靈湯を山里に移し給えば魚類は死をまぬがれ人民は病を助かる事その功德は幾万年にも伝えられるであろう」と言い終わるとその姿は見えなくなつた。

上人は思った。これは只人ではない。薬師如来のお告げであろうと斎戒沐浴して海岸の洞に入り、断食して祈る事三七日（二十一日）、満願の夜後ろの山々が鳴動し海上の波が逆巻いてその音は百千の雷のようであつた。

しばらくして海中、山上が穏やかになつたので、上人が洞窟を出てあたりを見廻すと、後ろの山の麓に雲のように立ち昇るものがあり、上人が怪しみながら其処にいつて見ると、山が崩れて石と石の間から熱湯が湧き出て、其のありさまは、神竜が口を開いて水を吐き出しているようであつた。

上人は私の念力が満願になり海中の温泉が此処に移つたのであろうと、祈ること更

に一七日（七日）にして立ち去られた。

今、熱海の里人が大湯と呼んでいるのは是れである。天平宝字（七五七～七六五）より文政十三年（一八三〇）に至る千百余年の昔から一日もお湯の湧き絶えることがないのは誠に神変不思議の靈泉である。

里人の言い伝えにも色々な説があるが暫くはこの説に従うと由来を述べた後、記述は次に神社の項となり、最初に湯前権現、続いて来宮大明神と進む。先ずは湯前権現の項である。



社殿全景

## 湯前権現

上町より一町余り西に在り、祀られている神は少彦名命、鳥居の傍らに碑が立つてゐる。明和七年（一七七〇）に社人が建てたもので、文は信陽源通魏、書は東江源鱗で、千百余字を連ねて温泉の「生い立ち」を記し、天平勝宝元年（七四九）己丑正月少彦名神童白によるという文があり、又慶長年中徳川家康公がここに入浴された事、寛永十六年（一六三九）家光公もご入浴なさろうとして御殿を建てられた遺跡及び調馬場も在つたと言う文がある。これは単なる言い伝えではなく、後に紹介する今井半太夫の「名主代々手控」に記録されている天和四年の家光公御入湯の時の「覚書」及び其前年の「熱海御殿建設の事」によつても知られる。

現在神社にある鳥居・石燈籠二基は、宝暦八年（一七五八）の夏、久留米の太守が此處に入浴にこられた時の御寄付であり、毎年九月十日に祭礼が行われ、その神靈のあらたかなことは里人の言い伝える所である。

以上は「熱海温泉由来」で山東庵京山の記する所ですが、この文章が今ではその存在も判らない鳥居の傍らに立つっていた石碑の内容を参考にしてゐるであろうことは充分に考えられるもので、其これまでの伝承を踏まえたものと思われます。

この事は元禄時代に書かれた秋峰著「豆州熱海地誌」や、後に坪内逍遙が熱海温泉の成り立ちを「熱海ページェント」という野外劇にまとめたときの内容と殆ど共通していることによつても一般に伝承されていたものと思われます。

ちなみに、仁賢天皇の時代というのは奈良朝廷の力が漸く関東近くにまで及んで來た時代であり、天智天皇の頃には、その力は東北地方にまで及ぶとともに政治機構も次第に整い全国的に神社や寺院に整備が行われはじめた時代にあたります。

やがて本地垂迹の思想が盛んとなり少彦名命は、薬師如来が日本では神に姿を変えて出現したものと考えられるようになりました。神仏混合というより神仏一体という考え方は、この時代から江戸時代にかけて大変永い間私達日本人の意識に大きな影響を

与えることになります。

湯前神社の次の項に来宮神社についての記述があります。いま一般に伝えられているものとは違った点もありますので、参考までに御紹介しておきます。



例大祭（秋祭り）

## 来宮大明神

湯前の社の西三丁ばかり山の上にあつて熱海の鎮守である。伝えられるところによると、和銅三年（七一〇）六月十五日、熱海の里人が網を下ろしたところ一尺程の木像を得た。魚ではなかつたので海中に捨てたが三度まで網にかかつて来たので大変不思議に思つて岩の上にあげて捨てておいた。そこに和田村の農夫（当時の来宮神社の社官青木氏の先祖）がこれを拾い家に持ち帰つたところ、其の家の童に神が乗り移り『われは五十猛命（いそたけるのみこと）である。久しく海中におつたが時が来たので出現したものである。この地の北の山に七株の楠があつて潮の聞こえない所がある。その地に自分を祀れば長く村人を鎮護し、温泉に浴するものたちに恵をたれ靈湯が病を癒す事を約束しよう』と申された。そして今の所に祀られることになった。自らおいでになつたと言うことで来宮と申し上げるよになつたと伝えられる。

六月十五日の夜、熱海の浦で獲つた魚を供え十六日に御輿を浜辺のお旅所に移し祭

りをした。今の神官青木氏の話に「来宮祭礼の時、御輿の上に作った孔雀に稻の穂を含ませているが、この稻穂は上町の北に住んでいる百姓平左衛門の田の内の穂より一茎を用ちうる。毎年祭礼のとき、時をたがえず生ずるが、ある年その田に稻が生ぜずどうしたことかと不思議に思いながら隣の田の石の間から生えて来た稻を孔雀に含ませる稻として供えたところ、その月の末に平左衛門の家に不幸があつた。しかし次の年には再び平左衛門の田より生じたという。それにしても誠に神靈嚇々たるものである。

—○—○—○—○—○—

湯前神社の歴史を知ることが出来る最も古い資料の一つに延喜式卷九巻の「伊豆国九十二座」（九〇五年編纂に着手）と康永二年（一三四三）の「伊豆国神階帳」があります。どちらも三島神社を筆頭に伊豆の神社が記録されております。

延喜式には祀られている神の名が記されていますが、少彦名命の名前もそれを連想

させる名前も見当たりません。しかし「伊豆国神階帳」の方には三十一番目に「従四位上熱海の湯明神」の名が記されております。「熱海の湯明神」を湯前権現と見てよいかどうか、従四位上という高い神階までついているので多少疑問も残りますがその可能性は有ると思われます。

湯前神社の歴史や伝承を知る手がかりを与えてくれる史料に、熱海の名主を代々務めた今井半太夫の「熱海名主代々手控抜書」があります。この抜書にも先の「熱海温泉由来」の中に出で来るのと同じ記録がいくつか残されております。例えば、征夷大將軍家康公は慶長九年三月に江戸より熱海に来られ、同月十七日に御入湯になりそれから伏見においてになつた。とか、三代将軍家光公の熱海御殿ご普請についても、寛永十六年に御殿は出来、三年経つた寛永十八年五月八日に品川御前様が来られて五月二十八日まで二十一日間御入湯に成り、二十九日に当地を御出発お帰りになられ、その折御殿の鍵大小九ヶを今井半太夫にお預けになり、その時の預かり状が記録されて

おります。品川御前が誰をさすのか今のところ私には判りません。

この記述の直ぐ後に「湯前権現石華表及仮面御額」の項があります。

湯前権現にある「大応見ノ面」は「ジャクヅル」の古作と伝えられており、元文年中（一七三六～一七四一）觀世太夫が入浴の節鑑定してもらつたところ、「ジャクヅル作」という事は判らないが大変古い作なので随分と大切にするよう」との事であつた。この面について久留米藩主有馬公から上袋・上箱の御寄進をいただいた。と記録されております。「大応見の面」とはどのような面なのか、また「ジャクヅル」とは何者なのかは不明です。

## 石鳥居銘

一、奉獻納石華表 安永庚子九月中旬

久留米左少将源朝臣頼僮公

武陽深川三井親和書之

一、同御額銅 湯前神社ト金ノ置上ケ

東都隱士闕其寧書ト御書付有之

石鳥居と石燈籠二基は現存しております今でもその文字を読む事が出来ます。六、七年前にこの文字を拓本に取りました。今も温泉組合の事務所に保存されていると思います。しかし乍ら安永庚子の記録に残された「大応見ノ面」と久留米藩主有馬頼僮公ご奉納の「大応見ノ面」保管の為と思われる上袋・上箱の行方は判りません。

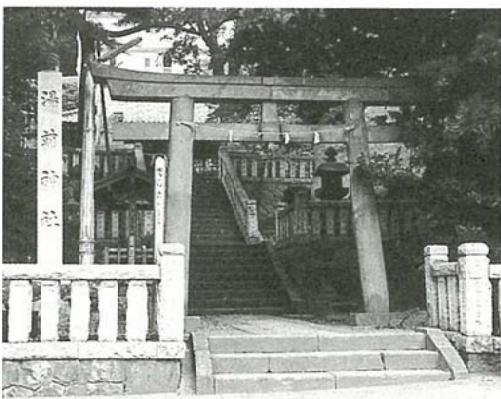
明治三十五年の火災で焼失したものか、あるいはその際運び出されてどこかに存在するものか今のところ定かではありませんが、幸運にして運び出されていれば貴重な品として保存して欲しいものです。

「石華表」が何を意味するのか鳥居の事かと思われますが不明ですし、また銅製の「御額」も現存しております。

二十年前に私達が奉賛会をつくった頃は、いまの神輿会館の位置に能楽堂が建っていました。戦前にはここで芝居や能も演じられ、大正、明治あるいはそれ以前には保養に訪れた名士、その前には武家の方々が能楽堂を使って演芸が行われ、住民も見物したものだと聞いております。今にして思えば久留米藩主が上袋や上箱を奉納する程の「ジャクヅル」作の由緒ある面があつたとすると、かなり格調の高い能なども演じられていたのかも知れません。

最近まであった能楽堂は勿論明治四十四年の再建以後のものと思いますが、能楽堂の再建が土地の名士達によって再建されたものであつた事は、能楽堂に書き込まれて

おり再建の日時も明治四十四年より後のものであつたと思います。能楽堂はずい分古く傷んでおりましたが、今考えると取り壊す前に記録をとり、図面を書き、写真に撮るなりしておくべきであつたと反省しております。



小倉藩主有馬公奉納の石鳥居



小倉藩主有馬公奉納の石燈籠

## 有馬頼僮のこと

久留米藩主の有馬頼僮公につきまして、久留米市の教育委員会に手紙で事情を書き、何か資料等があつたら教えていただきたいと連絡したところ、頼僮公の資料と「熱海湯治の記」という宝暦八年の原本のコピーを送っていただきました。それを拝見しますと、大名が湯治に江戸を出ることの手続きがどれ程面倒で大変なものか驚く程です。

久留米市から送られて来た「久留米藩政治経済史年表」（今方重一編）に熱海湯治関連の記録がありました。

### 六代藩主　則維（のりふさ）公

享保四年（一七一九）四月二十九日 御痰症につき御滞府願出

享保四年八月四日 御湯治御願済

同年八月九日 塔ノ沢へ御発駕十三日御着、塔ノ沢不相応に付熱海へ御入湯  
同年九月四日 热海より御帰館

享保五年二月十八日より三月十四日 热海御湯治

### 七代藩主　頼僮（よりゆき）公

宝暦八年（一七五八）四月二十八日 脚痛の為歩行困難、願い出て豆州熱海へ御湯治

同年五月二十六日 御帰殿

明和元年（一七六四）八月八日 豆州熱海、宮ノ下御湯治の為御出駕

同年九月七日 御帰館

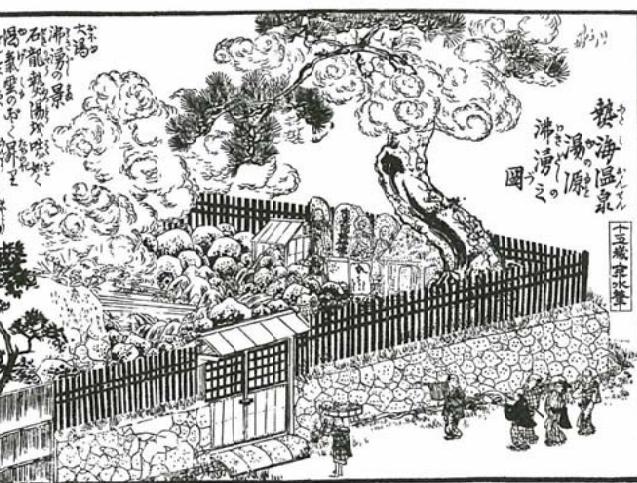
安永九年（一七八〇）八月八日 豆州熱海御湯治御願済

同年八月十六日 御出駕

同年九月十八日 御帰館、熱海御湯治中熱海權現へ常夜灯油代御寄付

以上を見ると久留米藩主有馬公は、父子一代にわたって熱海の温泉を愛好されてきたことが判ります。けれどもこの中には「大應見ノ面」の上袋・上箱・石鳥居・石燈籠等奉納の記録が見えないので、あるいは実際の熱海御湯治は外にもあったかも知れないと思うべきか、家臣のものを替わりに派遣した事もあるのか、とも思います。

有馬頼僮公は関流算学の大家で、その功績が評価を受け、明治四十四年十一月十五日明治政府より従一位を追贈されております。



## 湯前神社取調書

話は変わります。今井半太夫の「名主代々手控」に嘉永二年（一八四九）の「湯前神社取調書」が載っていました。

### 『湯前神社取調書』

伊豆國加茂郡葛見庄熱海村

一、温泉守護神 湯前大権現社

一、社地 長サ二十五間 横十二間

見捨地御座候

一、祭神 少彦名命 一座

一、神躰 木像にて座像、丈一尺二寸

但し作者不明

一、鎮座勧請は天平宝字の頃と申し伝えられるだけで古書等一切あらず  
一、祭礼の日は九月十日、年に一度で儀式等一切無く、お酒、供餅のみ

(棟札の写し)

一、造立せしもの 热海郷湯瓦村 湯宮

大旦那欄宣 四郎太夫家吉

大工 孫右衛門

一、石華表 高さ一丈五尺太さ一尺五寸

横一丈 有馬玄蕃守様御寄付  
享保四亥年

一、石燈籠 高さ 七尺五寸

宝曆八寅年

一、額 湯前神社 南樓関其寧書

安永九子年

一、社奥殿 間口六尺 奥行六尺

社壇 高さ三尺 横六尺

一、幣殿 二間四方

一、拝殿 表間口四間 奥行二間半

一、未社 古木楠一本廻り二丈四尺三寸

此外柴、細木、檜之木是有り候

一、石段 上段 正面八間 高さ八尺

下段 正面八間 高さ六尺

嘉永二年酉年四月十五日

京都吉田殿配下

欄宣 石渡佐渡

右の通取調べ相違御座無く候

以上、先に記した山東庵京山の「熱海温泉由来記」と重複する記録も多いと思いましたが、この文書には幾つかの注目すべき内容を含んでおります。その第一は嘉永二年のこの文書の中で初めて少彦名命と思われる御神体の木彫の坐像が出て参ります。ちなみに同時に行われた取調書の来宮神社の所にも『神体大己貴命木像 但し丈三寸五分座像ニ而作人之名無御座候、同（神体）五十猛命木像 但し立像ニ而丈壹尺壹寸五分、作人の名無御座候』

来宮神社にも湯前神社の所と同様のご神体があつた事が判ります。

第二は、棟札によるとして「造立せしもの」の名として熱海郷湯瓦村湯宮、大旦那禰宜四郎太夫家吉、大工孫右衛門の箇處についてであります。この項目は来宮神社の方には見当たらないので湯前神社の建物が比較的新しい建物だったのではないかと思われます。その為、資金を提供したものと直接建築にあたつた大工の名を記録として明らかにしたものと思われます。ここで湯瓦村と住所が記されているのは、今の湯河原町も当時の熱海郷の中にあつたと考えるべきか、或いは今の熱海市内に湯瓦村湯宮

と言う場所があつたと考えるべきか今のところ不明です。

又、大旦那禰宜となつてますが四郎太夫家吉さんは神官であつたと言う事が、これも不明です。来宮神社の項では取調書の署名人は青木日向正章となつています。これは来宮神社の神官として青木氏の名前がしばしば出て来ますので、青木日向正章さんは熱海の来宮神社神官の青木さん的一族だと思われます。

同様に考えると、取調書の湯前神社の項の神官と考えられそうに思います。ただ理解しかねるのは大旦那の四郎太夫家吉さんの方にも禰宜の肩書がついております。これをどう考えるべきなのか今のところ判りません。

第三に興味を引いたのは、未社が楠の古木となつてているのは珍しいのではないかと思います。今参道左側の道路との境にある楠の古木が当時より未社として祀られていましたのかどうか。

この取調書は京都吉田殿配下の禰宜石渡佐渡となつていています京都の吉田家といえば神道の宗家といった存在ですので地方の神官は身分的には京都吉田殿の配下と言つて

とになつてゐるのでしょうか。

京都から櫛宜の石渡佐渡と言う方がわざわざ熱海まで調查に出向いて来たとは考えにくいく思うのです。その理由として同じ年に来宮神社の方も吉田正三位侍従ト部朝臣良長配下の青木日向正章と言う方が取調書を書いている事を思えば、石渡氏、青木氏共に熱海在住の神官と考えた方が理解し易いと思います。



能楽堂の扁額



能楽堂（社殿右側石垣の上）

## 豆州加茂郡熱海郷湯前權現拝殿再興勧進の状

寛文七年（一六六七）丁未正月日

少し時代は逆上りますが寛文七年につくられた勧進状のコピーがあります。

これは昔、温泉組合長をしていた登坂辰夫さんが図書館に寄贈されたもので原文が残つてゐるかどうかは不明です。

誰が勧進を行つたのか、又実際にこれを使つて勧進が行われたかどうかも不明ですが史料の一つとして考えたいと思います。

「勧進の状」は始めに出湯の縁起として「熱海温泉由来」と同様な内容の伝承が記されております。もつともこの「勧進状」の方が時代的には古いものなのでこちらの方が元になつてゐるのかも知れません。「勧進の状」は、「出湯を山に移し里人を鎮護すべし」と湯前權現を祀つた。誠に諸病平癒をなさつてくださる神様であるから誰がこ

れを重んじないものがあらうか』と記した後『およそ天平の頃から今に至るまで九百余年の星霜をへて、いくとせの時雨の露に社殿の軒先を濡らし、三年吹く嵐のために宮居の壁を壊し、破損が酷くなつたので本社をば正保二年（一六四五）修理し、拝殿も再興しようとしたが財乏しき身の力なく、故に入湯の道俗男女貴賤の助力を戴きましたと願う勧進の趣旨によつて額の重い軽いにかかわらず相応の助力を求めるものであります。もちろんの志を持つて拝殿を再興することができれば、助力した人々は、この善根の力によつて種々の病を逃れて寿命を保ち、来世には必ず安楽の地に生まれるでしょう。誠に薬師如来は有難い、垂迹権現の功徳は大なるものがあります。御経にも述べられております。あらゆる病を悉く除き、心身を安楽にすることあります。『勧進の趣旨は以上の如きものであります。

寛文七年末丁正月日

原文は中々の名文で当時の寄附集めの趣旨の書き方に時代を感じます。文中本社と拝殿が別になつていますが今より規模は大きかつたかも知れません。

## 御汲湯御用

現在「湯汲道中」として、その歴史が伝えられている御汲湯について、今井半太夫の「名主代々手控え」の中にも書きとめられております。

それによると「御汲湯御用」は寛文年中より始まり、御汲湯のための御小屋場は今井半太夫門の通り（今のニューフジヤホテルあたり）幅三間半あまり、長さ五間ほどの坪数十八坪です。これに畠歩が十八坪付いております。よく知られているように、享保の頃、徳川吉宗公の御代に御汲湯上納が盛んに行われ、はじめは陸地を通つて仕送りしておりましたが、其の後は押し送り船で仕送りするようになります。享保十九年の間の九年間その合計は御湯三千六百四十三樽。これを指揮したのは享保十一年より享保十七年までの御代官は日野小左衛門様、享保十八年と十九年は斎藤喜六郎様、名主半太夫、組頭彦左衛門、同五郎右衛門、その外の者どもが相務めました。

天明四年度の御汲湯御用は、天明四年より天明五年の間八回、二百二十九樽。

天明四年（一七八四）八月四日御出役、江川太郎左衛門様より仰せ付けられ候、と記録されております。この御汲湯と引き換えに冥加金免除を許されていたようで天保八年に熱海村組頭要右衛門が差し出した役所宛の文書が記録されております。

『恐れながら書付を以つて申し上げ候』

「当村温泉冥加につき納めずにきた事情についてお尋ねですが、温泉汲み湯御用を元々相勤めたことについて冥加金の上納は致してこなかつたと申し伝えられて参りました。」と申し述べ理解を求めています。

家康公が好まれ、家光公が御殿まで建てて湯治の地に選ばれた熱海の温泉。御汲湯御用は熱海の温泉の質の良さを当時天下に示したもので、今も熱海の誇りであります。

### 木村喜繁の伊豆紀行と熱海

幕末に咸臨丸の船長として使節団を代表し、勝海舟等をともなつて渡米した木村撰津の守の父親にあたる木村喜繁は、大身の旗本で天保三年幕府のお薬園の一つで樟腦の生産地である伊豆の楠の御料林を幕命により、幕府御用の御朱印をたづさえ視察に伊豆を訪れております。その時の旅日記は当時の風俗をかいしま見せてくれる大変興味深い旅日記であります。この「伊豆紀行」の中に視察の帰りに立寄った熱海温泉の天保三年当時の様子が生き生きと書かれております。

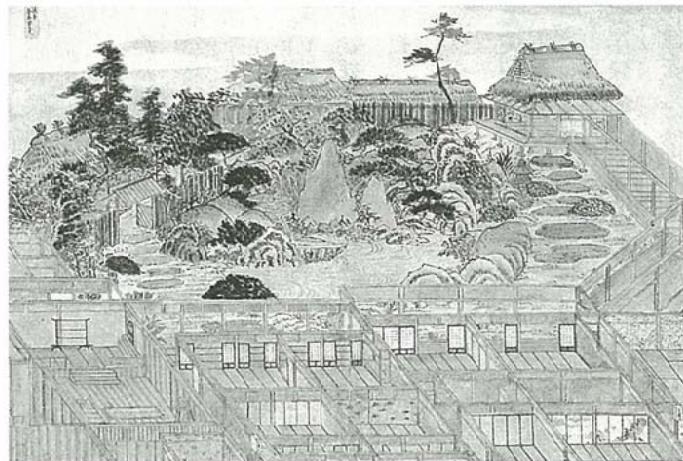
木村喜繁の一行は、帰途三島宿から軽井沢部落を通つて熱海に下りました。一里ほど歩いて熱海に入ると村の入口に名主今井半太夫が麻の棒で出迎え村役人達も大勢付き添つて半太夫が営んでいる旅宿に向かいます。このあたりは山より清水を桶で取り、往来の山際には高さ一丈程のところの桶で温泉を流していました。

半太夫の旅宿は表構えも綺麗で玄関も広く、座敷も幾間となくありました。この時

喜繁は湯宿のたたずまいをスケッチした。

専門家のように正確で見事な絵を残しております。この絵の写しは熱海の図書館に保存されておりコピーをもらうことも出来ます。

宿に入ると上段の間に案内されましたが、此処は十二畳で床の間に違棚、三宝に長熨斗をおき、刀掛。御朱印を載せる三宝は新規に作られた様、床には唐絵を三幅かけてあります。ここは二階屋で水屋も付き、部屋の向こうには伊豆の海原が一望できます。この二階屋には高名な絵、和歌その他種々ありました。



今井半太夫の旅宿 一碧楼（静岡県立中央図書館蔵）

暮合い頃になると遠雷の音が段々に近くなるように思われましたが、それは雷ではなく温泉の湧き出る音で、音は程なく止みました。温泉の噴出は朝の六時頃と夕の六時前に二度づつ湧き出るそうです。

入浴に来た人々の中には、若し庭や外に湧き出たならば一命にもかかわる、こんな所に長居は無用と湯にも入らず寝も出来ず、夜明けには早々と出立して行く者もあるとのこと。宿には雁皮紙や楠細工など土産の品を売りに商人達がおとずれ家来達も買い込んだ様子。買った品物は旅先から江戸へ送ることも出来るとのこと。

天保の頃の御朱印を携えての旗本の公務の旅と当時の本陣の様子がよく描かれているので、直接湯前神社は出て来ませんが紹介しました。但し、この二十五年後には安政の大地震があり熱海も壊滅的な被害を蒙ることになりますので町の様子は一変してしまったものと思われます。

## 今井半太夫

「名主代々手控え」を残された今井半太夫という方は、これ等貴重な史料を残してくれただけでなく熱海村の村民のために災害の際には私財をなげうち、産業の育成にあたっては良き指導者として数々の貢献をはたす等、熱海の恩人とも言うべき人であります。代々半太夫を名乗っていたようで、永い間名主職を勤めて来られた方で、何時の頃から名主を勤められるようになつたのか、半太夫を名乗るようになったのは何時頃からか、その前は何をしておられた方なのか、今のところ判りません。

明治の中頃までは名主を勤めておられましたが、何故名主をやめられたのか、又、その後どうなつたのか資料を求めて是非明らかにしなければならない方であります。

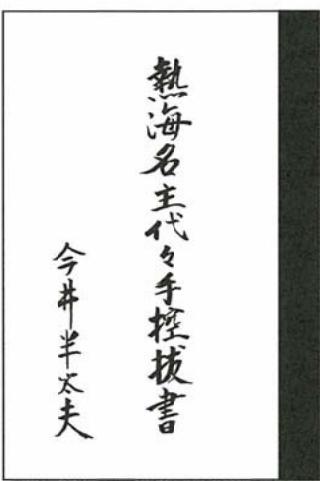
今井写真館の今井さん、三ツ星工業の今井さん等はその血縁に繋がる方々と聞いておりますが正確な所は判りません。

明治の中頃まで半太夫を名乗つて名主を勤めておられた方の奥方は裾野の方の名主

の家の出の方で老後は実家の方に帰られたと、何かの本で読んだ記憶があります。もしそうであればその折り書いたものや、書簡等も裾野の方に持ち帰られたかも知れません。是非、今後調査の上、色々な事を明らかにして欲しいものです。



鳴滸館（昭和2年12月撮影：今井写真館提供）



今井半太夫名主代々手控え抜書

## 湯前神社と温泉療法

湯前神社の祭神、少彦名命は温泉療法の神様であることは先に述べました。

温泉療法と言えばその草分け的存在として、熱海の「喰氯館」（きゅうきかん）があります。

「名主代々手控え」にも喰氯館に関する三通の記録が残されております。

### 〔喰氯館敷地献納の件〕

静岡県伊豆国加茂郡熱海村

持主 今井半太夫

場所 加茂郡熱海村字本町四四五番乙号の内

一、宅地 四畝二十七歩

熱海村の中には温泉宅地も夥しくありますが右に書いた私の所有地は祖先伝来の地で子孫代々居住してきた所でございます。それに加えて源泉の地であるため従来「元湯」という名で呼ばれて参りました。恐れながら申しますと最上にして無比の地でございます。

しかしながら、今回宮内省におかれましては、厚い思い召しをもちまして、普く天下の公衆の患者の疾病を癒そうとして蒸気浴室をご建設になり、温泉改良のご趣旨によつて上記の土地を求めておられると仄聞いたしておりました。私どものような者といたしましては感激の極みでございます。

つきましては、祖先以来、大御代のご恩澤に浴し、無事に生活してこられたことを有難いことと考え万分の一でも国の御恩に報じたいと思いまして、右の宅地四畝二十七歩を献納させていただきたいと存じます。尤も献納の土地にある温泉につきましては、従来どおり使わせていただけますよう御願い申し上げます。

右縮図を添えて御願い申し上げます。お聞き届けいただければ家の面目  
これに過ぎず、ありがたき仕合せに存じます。どうぞこのことを御奏上  
いただけますよう謹んで御願い申し上げます。

明治十六年八月

右 今井半太夫

右同人男 今井俊太郎

静岡県令大迫貞清殿

献納につき宅地分筆のため地権証書き換え願い

熱海村四四五番地字本町

一、宅地 二反九歩 持主 今井半太夫

内湯坪六歩

この地価 金七二六円六十五銭

この百分の三 金二十一円六十五銭

この百分の二半 金十八円一銭六厘

熱海村四四五番地乙の一字本町

一、宅地壹反五畝十二歩 持主 今井半太夫

この地価 金五四六円七〇銭

この地税 金十三円六六銭八厘

熱海村四四五番地乙の二字本町

一、宅地 四畝二十七歩 献納地

この地価 金一七三円九五銭

この地税 金四円四十三銭八厘

右地所献納致しますので地権証お書き換えくださいされ度、  
図面を添えて御願い申し上げます。

明治十八年

右献納人 今井半太夫

静岡県令閔口隆吉殿

### 「喰氣館建設」

同館は明治十八年三月会館式施行となり、当日は県知事を始め各署長、  
郡長、町村長等の来賓で各人の祝辞・演説があり甚だ盛会なり。

一金五十円也 寄付者 今井半太夫

右金額は開館式の費用に寄付いたし候

喰氣館掛役員左記の如し

取締役 今井半太夫

会計掛 石渡喜右衛門

監督 日吉六右衛門

喩漬館は湯治に科学的根拠と方向を示したと言う点において明治日本の近代化への具体的な一步を進めるものであり温泉療法における熱海の先進性の歴史の象徴的な出来事でありました。

この喩漬館の発想・建設につきましては、右大臣岩倉具視・後藤新平・井上馨・福岡孝弟等、明治新政府のトップブリーダーとも言うべき人士がかかわり、衛生局長の長与専斎と宮内省御用掛の肥田濱五郎らが建設を担当しました。もつて其の盛大さは知るべきであります。

熱海の温泉研究について、もう一つの史料を紹介します。

明治七年に近江の住人、中島桑太の著書に、「熱海温泉考」という本があります。著者はこの本を書いたいきさつを次のように書いております。

「病を養いに熱海温泉に赴いたところ数日にして病が癒えた、そこでこの泉の性質を調べてみようと、携えてきた薬品や機械を取り出し、ほぼ成分を知る事ができた。ただ旅先の事で薬品・機械も乏しかつたので他日精密な試験をしたいと考えて主人に

話したところ『古来より未だかつてこの泉の成分を知るものは居ませんでした。この本は浴法や効果も記されているので温泉場の宝典ともなるべきものです』と言うので主人の思うに任せることにした。」として試験の方法、成分分析、入浴の効果、適応症が精述されています。明治七年にこんな事がと驚くばかりです。

つづいて明治十一年には鈴木良三氏によって「伊豆國熱海温泉試験説」が発行されています。その中で鈴木良三氏は「明治八年八月予、官命を奉じ村橋次郎・三崎精輔の二氏と共に熱海に赴き鑛泉中に含む所の氣類と熱度」を試験した、と述べて研究の成果を記述しています。

更に明治三十八年の地学雑誌には、著名な科学者である寺田寅彦・本多光太郎両氏によって「熱海間歇泉に就いて 附大湯の変動」が発表され間歇泉についても科学的研究が行われはじめました。この様な熱海における温泉及び温泉療法の歴史をふりかえる時、現在の熱海に温泉及び温泉療法研究所の施設が一つもないと言うことは不思議という他ありません。

## 湯前神社再興の功労者、神部千三さんと神部俊男さんの事

現在、神社境内の向かつて左手に「金千円也、神部千三」と書かれた石碑があります。これは明治三十五年の火災によって湯前神社社殿が焼失した際、再興の資金が集まらず八年間程焼けたままになつていていた社殿の再興を決意した神部千三さんが、自ら金千円を拠出し、更に神部さんが呉服商を営んでいた東京神田の湯治仲間等にも広く呼びかけて二千円余の基金を作り、社殿を再興させた時の記念碑であります。

奉賛会発足当初は何の記念碑なのか、神部千三さんはどういう人なのか全く判りませんでしたが、祖父の足跡を尋ねて湯前神社においてになつたお孫さんの神部俊男さんが境内の隅でこの碑を発見して喜び「これは私の祖父が神社再興のため基金を寄付し遂に社殿の再興をはたした時の記念碑です」と申されて祖父千三さんの書き残された文書にその間の事情が書かれている等、色々と話を聞かせていただきました。

最初に神部さんとお会いしたのは当時温泉組合と奉賛会の事務局長を兼務していた

山田好男さんで神部さんが事務所を尋ねて来られて話されたそうです。

俊男さんが祖父の千三さんから聞いた話では、祖父は熱海の湯が健康に良いとしばしば熱海に保養に来ており、定宿として露木旅館を使うことが多かつたそうです。露木旅館に宿泊していた時、湯前神社の神が夢枕に立ち神社の再興を望まれたのが動機であつたと話されたそうです。

其の後、神部千三さんが書かれた自伝的文書のコピーをいただきましたが、そこにはこの間の事情が記されていました。

「此處に於いて、つくづく考ふるにこの如く身体も壯健に、家運隆昌なるは偏に神仏の加護によるは勿論、入湯の功も空し



神部千三さん

からず、且つは、遊芸師匠板東三代吉氏の薰陶も少なからざるを思ひ、まず第一に熱海の鎮守、湯前神社の去る十年前に焼失せし併、未だ寄付金不足とて、神域は恰も芥捨て場の如く壊滅状態になつてゐる事を悲しみ、何とか復旧させたいと考えて、率先して金壹千円を寄進し、猶友人にもすすめて淨財貳千円を作つて普請に取りかかり、明治四十四年になつて彫刻も見事な神殿が出来上がつて土地の人々は勿論、殊に宿屋の人々は大いに喜び、斡旋して久方ぶりに湯前神社の遷宮祝駕をなし、続いて大乗寺に板東師匠の門弟達と相図つて石碑を建てたれば同地大いに殷賑し将来必ず土地の繁栄を見るであろうと予言した。果たせるかな其の年、鉄道本線も施設される旨、新聞にも報道されたので、この土地に見込みをつけ買い入れる人しだいに多くなり、したがつて価格も二倍三倍といふ高値となり非常な活気を呈するようになつた。」

以上、神部十三さんの一文より少し現代風の文章にかえて引用させていただきました。

お孫さんに当たる神部俊男さんは、それを御縁に祭りの日にはご夫妻で参詣に見えられ、平成四年二月より毎年春と秋の祭りの時にそれぞれ壹百万円づつのご寄付をくださり今も続いております。そのご厚情に感謝して平成十年十月に顕彰碑を建てたところ大変に喜ばれて毎年の寄付とは別に金壹千万円の御寄付を戴きました、誠に感謝に耐えません。



神部俊男さん夫妻

## 明治三十五年の火災

熱海市消防沿革史には湯前神社火災の様子が以下のように記録されております。

一九〇二年、明治三十五年一月三十日、午後十二時「温泉寺」本堂より出火。本堂庫裡焼失、各部尽力一方ならず、幸い小屋倉を防ぎ他に延焼せざりき、翌日午前四時鎮火、原因怪火、損害凡そ壹萬五千円也。

一九〇二年、明治三十五年二月三日、午後十二時「大乗寺」本堂より出火。時恰も西風猛烈にして湯前神社に延焼し六棟焼失、官林「上の山」へ飛火し火口四方に広まり消火に困難を極む。各部大に活動し翌午前六時鎮火、原因放火、損害凡そ壹萬三千円ならんとす。

この年は更に災害が続き、同年九月二十日には津浪が襲い寺町海岸より浜町一帯の防波堤が破れ寺町全部浸水し各寺院まさに流出しそうになり、町場より浜町中町の海岸は家屋多くは浸水または波浪の為損害を蒙り婦女老幼は避難をなすに忙しく損害家

屋二十余件、負傷者数人を出す状況で、港内碇泊の諸船多くは破損し沈没せしものもあり、其の光景は慘憺を極めた。と記録されており、さらにその直後の九月二十三日にも大波による被害のあつたことが記録されています。

これ等災害があつて間もなく、わが国は明治三十七年の日露戦争に突入して行くことになります。

神部千三さんが湯前神社の再建を決意されたのはこのような時代でありました。若し神部千三さんがいなければ湯前神社の再建は遙かに遅れてしまつたろうと思われます。

## 宮大工香川常五郎のこと

右のような経過の中で火災後の再建がなされた湯前神社ですが、最近になつて神社の建築を手がけた宮大工の事が判りました。

そのきっかけは小田原市にある居神（いがみ）神社々史の編纂委員をしている神永勉君という学生が居神神社を建てた小田原藩最後のお城大工と言われた棟梁香川文造高之と息子の常五郎が熱海の湯前神社の建築も手がけていると言う記録がありそれを確かめるべく自分の目で見てみよう二月の春祭りの時に訪ねて来たことによります。この建築の依頼をしたのは神部千三さんかも知れないと思つておりましたが千三さんの記録の中には見当たりませんでした。それにしても社殿の外面だけではなく社殿の中や拝殿の基礎の方にも見事な彫刻が有つたので、どの様な宮大工が手がけたものかと深い関心をもつておりました。それが突然判明することになった訳です。

香川文造高之は「香川若狭藤原高之」の名を持つ宮大工であつたそうで、湯前神社

の建築は主として息子の常五郎ではなかつたかと神永君は想像していました。

常五郎は湯前神社の建築を金壹千円で請負つたと言われています。当時千円がどれ程の価値のものか不勉強で未だ調べておりませんが、今井半太夫が喰氣館の為に寄付した時の地価及び明治三十五年に火災の時の損害額、等々を参考にしただけでも大金であつたろうと思います。

常五郎達は小田原から職人達を引きつれて當時活躍していた軽便鉄道を利用して毎日通つたと言われております。神社の建築は明治四十四年に完成を見ました。

香川文造、常五郎の建築の特徴は、随所に彫られた木彫彫刻にあるそうで牡丹をはじめ、同じテーマの彫刻の美が、小田原周辺にある香川父子の手がけた建築の神社で各所に見られるそうです。

常五郎は名人気質の大工で宵越しの金は持たない主義で請負で得た金子は、小田原に帰ると職人達を引き連れて花街で豪遊してしまったため家族は大変苦労したと常五郎のお孫さんに当たる方は話しておられたそうです。

その後、丹那トンネルが開通し、新幹線が走るようになつて熱海温泉は全盛期を迎えます。昭和三十九年の新幹線開通を記念して熱海温泉組合は湯汲道中のイベントを行いました。このイベントは現在の湯汲道中に引継がれることになります。また神社の境内には地元の各旅館・商店が奉納者の名を入れた玉垣を造り、今も歴史を伝えております。

拝殿の左右に安置されている隨臣像の木彫の坐像は熱海の生んだ著名な彫刻家で文化勲章を受賞された澤田政廣さんの若い頃の作品で崇敬者により寄贈されたものと聞いております。

昭和六十一年には奉賛会々員の協力で宮御輿を購入し御輿会館も造ることが出来ました。春と秋の祭りには宵宮の神事と本祭りの献湯神事が行われ、源泉所有者や、旅館・寮・保養所から瓶子に入れた温泉が持参され、源泉の永遠に涸れることのないことを祈つて献湯の神事が行われます。

秋祭りには、百名近い市内の幼稚園児の稚児行列も加わつて総勢三百人程の湯汲道

中が行われ、夜は宮御輿を中心に数基の睦の御輿を加えた五百人余りの若者による御輿連合渡御が町の中心街を賑やかに熱氣でつつみます。夜店が参道を飾り、境内では年々各種催物が行われ福当て抽選会も子供達の大きな楽しみの行事となりました。

現在の春祭り、秋祭りも神事の外は、伝統行事として昔からあつたと言うのではなく試行錯誤の末、今の形が出来上がって来たものであります。奉賛会も、雨宮宮司を中心として初代会長内田滋さん、二代会長高橋高次郎さん、三代会長大野英市さん、四代会長岡本久美子さん、五代会長内田進さんと引継がれて創立二十周年を迎えることが出来ました。

奉賛会の発展に尽力され故人となられた多くの会員の方々に心より感謝の意を表したいと思います。

平成十四年四月吉日

熱海湯前神社奉賛会副会長  
熱海温泉組合常任理事  
山 田 芳 和

## 湯前神社奉贊会役員名簿

平成13年5月現在(順不同)

<b>【顧問】</b>	川口 市雄 (熱海市長) 田島 秀雄 (静岡県議会議員) 菊間 一光 (熱海市観光協会会長) 鵜澤 精一 (熱海温泉ホテル旅館協同組合理事長) 神部 俊男 (神部基金奉納者)		
<b>【常任相談役】</b>	原田 さち子 大岡 英市 田野 久美子		
<b>【相談役】</b>	大岡 瞳治		
<b>【名誉会長】</b>	二宮 興治		
<b>【会長】</b>	内田 進		
<b>【副会長】</b>	塩谷 敦子 雨宮 盛克 内田 和夫 宇佐美 定行 大石 要作 神木 健策 佐藤 德子 志田 恒治 松本 義廣 平井 哲朗 田中 秀宝 山村 康夫 山田 康憲 山田 一晴 若林 正修 吉田 修	・ 山田 芳和 ・ 三枝 俊雄 ・ 駒嶺 洋 ・ 大川 貞夫 ・ 岡 武秀 ・ 小林 郁 ・ 佐藤 太郎男 ・ 杉田 和夫 ・ 赤尾 信幸 ・ 竹内 静香 ・ 馬場 節男 ・ 馬場 俊光 ・ 藤田 龍一 ・ 八代 一雄 ・ 渡辺 智	・ 渡辺 友夫 ・ 青木 正次 ・ 内野 正正 ・ 大山 伊佐男 ・ 加藤 則則 ・ 岩本 寛平 ・ 三宮 清海 ・ 鈴木 東海 ・ 磯屋 雄夫 ・ 土用 德雄 ・ 鈴木 雄充 ・ 小磯 佳徳 ・ 日吉 宏貴 ・ 松尾 弘身 ・ 小澤 克立 ・ 荒井 立
<b>【常任理事】</b>	谷清・田幹夫 岡善一・田好男 山田晃司・吉田正人		
<b>【会計理事】</b>	池谷 清		
<b>【監事】</b>	岡田 善一		
<b>【事務局】</b>	山田 晃司 吉田 正人		



宮神輿渡御（秋祭り）



湯汲み道中（秋祭り）

# 湯前神社の歴史と伝承

(定価  
五百円)

平成十四年四月発行

編集責任者  
山田芳和

監修  
湯前神社宮司  
雨宮治興

表紙題字  
雨宮豊子

発行者  
湯前神社奉贊会

熱海市中央町一番一号  
市役所第二庁舎内

電話〇五五七(八一)二三二四

印刷・製本  
アド屋

